

2017年度 第三回国際研究集会

2017年11月26日(日)

発表会場：立教大学池袋キャンパス11号館・15号館（マキムホール）

①M301 ②M302 ③A301 ④A304

◆タイムスケジュール

	第一会場 【M301】	第二会場 【M302】	第三会場 【A301】	第四会場 【A302】
10:00	村上春樹 「騎士団長殺し」	タイからのまなざし ／タイへのまなざし	劉怡臻	SPOEHRLE MACHA
10:45			吳惠升	安住紀宏
11:30			陳童君	
	山根由美恵 (パネル代表)	久保田裕子 (パネル代表)		
12:30	昼休み			
13:30	古田高史	劉春燕	金東僊	南明日香
14:15	村上智子	崔世卿	高橋梓	Forgo Teodora Maria
	休憩			
15:30	講演 坂井セシル【M301】			
16:30	閉会の辞【M301】			
	*終了後、懇親会【第一食堂】			

◆研究発表要旨

【午前】 10:00～12:30

* 第一会場

村上春樹「騎士団長殺し」 —— 〈メタ・テキスト〉性と「物語」のその先——

山根由美恵 平野芳信 内田康 Dalmi Katalin (ディスカッサント) 跡上史郎

(要旨)

村上春樹文学は現在翻訳言語が 50 以上となり、その国際性が際立っているのは周知の事実である。この事態と連動して、村上文学研究はグローバルな規模で活発に進められている。ただ、膨大な研究成果は現在一元化して把握できる段階になく、それぞれの国における優れた研究活動が積極的に「交流」することは未だ困難である。また、日本国内に目を向けると、研究センターなどの基盤整備が進まなかった点、学会という場でのパネル発表はあまり行われてこなかった点など、世界への発信が弱い状況となっている。

本パネルでは 2017 年 2 月刊行、村上春樹「騎士団長殺し」を取り上げる。既に書評などでも指摘されているが、「騎士団長殺し」はこれまでの村上文学の要素が多くちりばめられており、村上が自身の物語をメタレベルから捉えたことによって生まれた〈メタ村上春樹テキスト〉と言える。1980 年代以来一貫して「物語」の重要性を表明してきた村上は、30 数年を経てテキスト自体がその仕組みについて自己言及的な〈メタ・テキスト〉に辿り着いた。これは、激変する世界情勢の中で、現代における「物語」として相応しい強度を持つものなのだろうか。

日本・台湾・ハンガリーと国は分かれているが、本パネルメンバーはこれまで「物語」を重要なキーワードとして村上文学を論じてきた。村上文学の「物語」性は、国という枠を越え積極的な研究「交流」をする上でも、有効な概念であると言えよう。今回、本作の〈メタ・テキスト〉性に正面からぶつかり、村上文学の可能性と限界、および現代における「物語」性について発表を行う。それは世界的に注目されている本作を国際研究集会という場でいち早く世界へ発信するという意義も持つ。

物語構造論（話型論）を展開してきた平野は、村上は本質的に「短篇小説作家」であると捉え、短篇と長篇さらにはその中間の形態としての連作短篇集という「物語」の試行錯誤の末に「騎士団長殺し」は生まれたと分析する。そして、本作は村上のこれまでにない達成であると積極的な評価を行う。

山根は、メタ化の試みと家族という「連帯」を強調した反カタストロフの結末に対する違和感を「物語」の認識システムという視点から考察する。「連帯」は同時代における「排他」の方向性に対する村上なりの意思表示と捉えられるが、メタ化という方法とテキストの方向性との間には乖離があると分析する。

これまで〈王=父殺し〉の「物語」という側面から分析してきた内田は、本作においても「父」という存在に基点を置く。「騎士団長殺し」は〈「父」を継承していくこと〉の可能性と不可能性に関して問題提起したテキストであり、そこには試行の深まりがあると論じる。あわせて淡江大学・村上春樹研究センターの一員として、台湾における村上文学の享受・研究状況を報告する。

ハンガリー人研究者であるダルミは、ハンガリーにおける村上文学の受容の様相を報告した上で、テキストを 1920～30 年代のヨーロッパ絵画に見られる「ノイエ・ザハリヒカイト」との関係で分析する。また、ウィーンという舞台および「アンシュルス」について、ヨーロッパ人の視点から考察する。

跡上は、「物語」というキーワードによるアプローチのいくつかの可能性を整理しつつ、ディスカッサントとして、議論の活性化を図る。

「騎士団長殺し」は〈メタ村上春樹テキスト〉としての新局面を示唆していると考えられるが、従来村上が書いてきた「物語」との関係性、現代における有効性において謎の多いテキストである。注目度の高い同時代のテキストをリアルタイムで議論する意義とあわせて、フロアとの積極的な討論を行い、アクチュアルな解釈を提示したい。

* 第二会場

タイからのまなざし／タイへのまなざし ——日本近代文学をめぐる受容状況——

久保田裕子 メータセート・ナムティップ タナポーン・トリラッサクルチャイ

(要旨)

本パネル発表「タイからのまなざし／タイへのまなざしー日本近代文学をめぐる受容状況」は、主に 1960 年代から現在まで、タイにおいて翻訳や出版を通して日本近代文学が受容されてきた状況について、両国の歴史的、社会的関係性と交錯しつつ展開していった経緯をたどることを目的としている。そしてタイにおける日本語表現をめぐる表象が、同時代の日本語テキストの中のタイをめぐる表象に向けられたまなざしと、どのように交錯し、またすれ違っていくのかという経緯の一端を明らかにしたい。

タナポーンの発表「タイで刊行された月刊誌「サンコムサート・パリタット（社会科学評論）」における日本文学の翻訳」では、1972-1973 年の日本製品排斥運動後、日タイの相互理解をより促進するために、国際交流基金が文献翻訳・出版に関する支援などの文化交流事業を行った経緯について報告する。これらのタイ語に翻訳された日本文学作品は政治的な問題を反映して特定の文学作品に限られる傾向があった。一方で 1960-1970 年代、知識人に支持された「サンコムサート・パリタット」は日本側の支援を受けず、タイ知識人の主導のもとに翻訳された日本文学作品が掲載されている。同誌において、日本文学が 1970 年代のタイ知識人に選択され、翻訳を通して受容された経緯について、同時代の社会的背景を通して考察する予定である。

ナムティップの発表「タイにおける芥川文学の受容とアダプテーション」は、1950 年代-2000 年代のタイにおける翻訳を通じた日本文学の受容に関する状況の全体像について報告する。2000 年代以前は、欧米で人気のある川端、谷崎、三島などの作品が英語版から多数翻訳されたが、発行部数も少なくそれほど浸透していなかった。21 世紀に入って、ポップ・サブカルチャーの流入・拡大とともに、ようやく現代文学、ライトノベルなどが直接日本語から翻訳出版されるようになり、新しい読者層が飛躍的に増加した。このような状況に伴い、難解なイメージを持たれていた近代小説も、最近再評価されるようになった。その中で認知度・関心度の高い芥川龍之介の例を中心に引き上げ、テキストの翻訳事情や受容状況について報告し、日本文学のテキストが翻訳を通してタイ文化の中でどのように受容され、翻訳を通してアダプテーション（二次創作）されてきたかという経緯について考察する予定である。

久保田の発表「日本近代文学の中のタイ表象」では、太平洋戦争前／後のタイを舞台にした日本語テキストの中のタイ表象の構築と流通の経緯について考察する。戦後文学の作品としては、三島由紀夫『暁の寺』（新潮社、1970）以降のツーリズム的環境、ベトナム戦争や東南アジア地域の国際問題を反映した日タイの関係性がテキスト成立に及ぼした影響について論じる予定である。また三島由紀夫のテキストについて、タイを含むアジア地域を中心とした翻訳状況を通じた受容のあり方についても言及したい。

タナポーン、ナムティップの発表では、タイで展開していた日本近代文学の受容状況について分析することで、日本国内では不可視の異文化の視点から構築された日本近代文学の一側面を明らかにする。久保田の発表は日本語テキストにおいて、タイの場所と人に向けられたまなざしを考察することを目的としているが、これらの発表を通して、異文化に対する相互のまなざしがどのように交錯し、またすれちがっていったのか、確認する場所にしたいと考えている。

* 第三会場

植民地台湾における啄木文学の受容と継承について

——戦前の新聞及び雑誌にみられる記事を中心に——

劉怡臻

(要旨)

啄木文学は国境や時代を越えて読み継がれてきたが、台湾という場もそのうちの一つである。しかし、台湾はただの外国ではなく、同時に戦前日本の植民地であったゆえに、今日とは違った視点から啄木文学が日本語で読まれてきたことに注目する必要がある。また、個人と啄木との繋がりだけにとどまらず、新聞や雑誌などの形で啄木文学が如何に共有されてきたのかについても確認することができる。先行研究では、高淑玲氏によってすでに『台湾教育』にみられる山口楓溪、沼川定雄の三行書き短歌を啄木受容とみることができると指摘されている。さらに、戦前台湾の雑誌や新聞といったメディアにおける啄木関連記事を考察すると、『台湾日日新報』、『台湾遞信協會雑誌』、『台湾鐵道』、『台湾警察時報』、『台湾山岳彙報』、文芸雑誌『文芸台湾』、短歌雑誌『朱轡』『原生林』などで啄木の短歌、小説、評論が取り上げられていたとがわかる。文芸欄で取り上げられた啄木に関わる書物新刊の紹介も含めて、啄木像は台湾において如何にイメージされてきたのか。また、なぜ植民地台湾で啄木が取り上げられてきたのか、そして同時に日本内地の関連及び、戦後台湾における啄木に関わる文学者の記録との関連といった問題を更に掘り下げる必要がある。本稿では、日本統治下の植民地台湾における新聞及び雑誌にみられた啄木関連の記事を中心に、戦前台湾における啄木文学受容とそのイメージが如何に形成されたかについて明らかにしたい。

戦時下における石川達三の「戦争協力」

——「資料」(計一三〇点)から見えてくるもの——

吳惠升

(要旨)

第一回芥川賞受賞作『蒼氓』(一九三五年)で出発した石川達三は、一九三八年、南京事件に取材した『生きてゐる兵隊』で筆禍事件を引き起こすが、名誉回復を狙った『武漢作戦』(一九三九年)以後「戦争協力」への第一歩を踏み出した。中国では、『生きてゐる兵隊』の翻訳発行以来、石川達三を「反戦作家」として位置付けてきたが、一九九〇年代末に王向遠氏に代表される研究者たちによって覆されるようになっていく。

一方、日本においては、戦後すぐの小田切秀雄らの『生きてゐる兵隊』批判を経て、最近では例えば、川上勉が『石川達三——昭和時代の良識』(萌書房、二〇一六年六月)で「昭和の時代にあつて、社会や政治に対する抗議と怒りの意志を表明し、首尾一貫した主張を貫き通した」とその出発から亡くなるまで一貫してその思想は「変わらなかった」と評価している。

しかし、果たしてそうであったのか。本発表は、「全集」未収録のものも含めて戦時下における石川達三の活動を精査し、文献や資料の収集を行うことによって年表を作成し、その「戦争協力」の実態を明らかにするものである。

東京裁判と戦後日本文壇の南京大虐殺表現

陳童君

(要旨)

東京裁判の南京大虐殺公判が始まったのは一九四六年七月であった。これに先立ち、戦時下で南京大虐殺に言及したために発禁となった石川達三『生きてゐる兵隊』は一九四五年一二月に河出書房より再刊された。奥付に「発行50000部」と書かれているこの長編小説はなお一九四八年の八雲書店版『石川達三選集』、一九五二年の筑摩書房版『現代日本名作選』および一九五三年の講談社版『現代長編名作全集』のいずれにも収録され、長い間戦後日本の唯一の南京大虐殺物語として広く読まれていた。ところで内容から考えると、戦後版『生きてゐる兵隊』は戦中版の削除・伏字を復元した以外に本文の変化がほとんど見られないので、東京裁判からの影響も当然存在しない。この点でいうと、戦後版『生きてゐる兵隊』の南京大虐殺表現は、同時期に流布していた東京裁判のそれとは質を異にしているはずであり、また、本作を東京裁判以降の他の関連作品と比較することによって、戦後日本文壇における南京大虐殺の表現空間の特質がはじめて見えてくるように思われる。本発表は、まず戦後版『生きてゐる兵隊』を南京大虐殺の東京裁判公判録と比較し両者の相違点を確認する。そのうえで、東京裁判以降に日本で発表された主な南京大虐殺物語を『生きてゐる兵隊』と照合しながら解説し、これらの作業によって戦後日本文壇と南京大虐殺との相関を明らかにしたい。

* 第四会場

折口信夫の小説『神の嫁』をめぐって、近代文学について再考する

SPOEHRLE MACHA

(要旨)

本発表では、日本近代文学における折口信夫の作品から思想にわたり、学者・詩人といわれる両面を問い直し、また文学の成立過程について考察する。そのために、小説『神の嫁』をめぐって、折口の歴史批判や文学観、及び学問について論じる。近代文学という枠組みをゆらしながら、折口信夫の文学を新たな視点から分析する。

大正後半から昭和初期にかけて、折口「学問」から「創作」への過程を整理し、作品読解を提案する。また、確認した折口の歴史に対する文学観を視野に入れながら、創作の作法や構造を分析する。それによって、折口の作品を改めて位置づけることを試みる。先行研究では、折口の「古代」が「近代」の上に成り立つということがすでに記述されたが、それは具体的に文体からも確認できる。要するに、折口は近代的な表現方法によって、「古代」を語ったのであり、また、文学を書くこと自体が他の「学問」に対する行為であったということを提示する。

テキストの不可能性 可能性のテキスト ——前田愛『文学テキスト入門』再考——

安住紀宏

(要旨)

「テキスト論の袋小路」が叫ばれている。作家論・作品論に対抗する理論として発展してきたにもかかわらず、今日ではむしろその作家論・作品論に取り込まれてしまったというのだ。方法論だけでなくテキスト概念それ自体を再検討すべき契機を我々は迎えている。

前田愛はテキスト論の嚆矢とされるが、死後出版された『文学テキスト入門』は、実際には彼が

「一つ穴のムジナにすぎない」と批判した当の作家論・作品論的内容である。それだけでなく小森陽一・島村輝・山本芳明の連名とされる『文学テキスト入門』私註——前田愛さんの言い残したこと」は「前田さんの声」(=「意図」)の「再現」に固執している。テキストの議論すらも「一つ穴のムジナ」と化してしまうのは、今日に特有な問題というより、テキスト概念それ自体の原理的な問題なのではないか。『文学テキスト入門』はテキストの不可能性を露わにしているのだ。

しかし、それでも文庫版解説にて小森が語るように『文学テキスト入門』が「開かれたテキストでもある」のなら、このテキストを再考し、テキストの可能性を見出したい。

【午後】13:00～15:00

* 第一会場

福田恆存『キティ台風』論 ——「饒舌」という試み——

古田高史

(要旨)

本発表では、福田恆存(1912～1994年)の戯曲『キティ台風』における「饒舌」という「せりふ」のありようの分析を通して、劇作家として出発した福田の問題意識について、考察する。

『キティ台風』は、三島由紀夫により、「戦後の新劇界においてこの作品の初演は、画期的な出来事であった。言葉の真の意味での現代劇が、戦後五年目にようやくあらはれた時の喜びは忘じがたい。」と評されている。こうした評価からも、『キティ台風』が、発表当時において、何らかの「新しさ」を持っていたことが伺える。

『キティ台風』の、「饒舌」な登場人物たちは、お互いの「饒舌」により、「思ひがけない結果」を招いてしまう。本発表では、『キティ台風』と同時期に福田が発表した評論「戯曲のリアリズムとは何を意味するか——主として「劇作派同人」に——」なども参照しながら、「饒舌」という「せりふ」のありように込められた福田戯曲の出発点と同時代的背景を提示したい。

憑依する二人称 ——ロシア語版『金閣寺』の翻訳法——

村上智子

(要旨)

ロシア語版『金閣寺』は、翻訳者グリゴリーイ・チハルチシヴィリによって一九八九年に雑誌『外国文学』に発表され、一九九三年に単行本として刊行された。

チハルチシヴィリは『金閣寺』を紹介する際に、主人公溝口に多大な影響を与える柏木と、ドストエフスキー『悪霊』において主人公スタヴローギンを悩ますデーモンとの類似性を強調している。本発表ではチハルチシヴィリが『金閣寺』と『悪霊』の登場人物を重ね合わせて語ろうとしていることの意義について、翻訳テキストの分析から明らかにする。

ロシア語版『金閣寺』では、『悪霊』における人称代名詞の用法と類似する翻訳法によって、溝口の思想形成の過程が前景化される。柏木が使用する二人称単数形を溝口が金閣に対して用いることによって、溝口は柏木の影響を自覚しつつそれを超克しようとする存在として立ち現れてくる。

また、本発表ではロシア語版『金閣寺』が政治体制の大きな転換点において発表された意義についても考察を加えたい。

* 第二会場

「雨ニモマケズ」と「北国農謡」

劉春燕

(要旨)

本発表は、賢治詩「雨ニモマケズ」と「北国農謡」について論じるものである。「雨ニモマケズ」は1941年4月に北京近代科学図書館出版の、銭稻孫によりタイトル「北国農謡」に翻訳し初めて中国に紹介された。現在の中国では様々な訳が出ているが、銭稻孫訳「北国農謡」の完成度はもっとも高いとも言われている。しかし、日本支配下の植民地である北京においては、当時の「日偽」と呼ばれ、複雑で敏感な戦争時代の背景として、あまり評価されていなかった。本稿では先行研究や参考資料を考慮した上で、原詩「雨ニモマケズ」を対照しながら訳詩「北国農謡」に見られる銭稻孫の翻訳特徴を検討する。

研究方法としては、主に原詩と訳詩との比較手段を使い、訳文を6節に分け、訳文の体裁や意思表現や語彙の選び方などを比較する。これにより、銭稻孫は訳詩「北国農謡」でいかに、自らの理解で原詩「雨ニモマケズ」に無い要素や表現を取り入れ、訳詩の完成度を高めていったのかを明らかにする。

詩誌『MADAME BLANCHE』対『椎の木』のスキャンダル

崔世卿

(要旨)

『MADAME BLANCHE』は「アルクイユのクラブ」の機関誌として北園克衛と岩本修蔵編集で昭和七年五月に創刊された詩誌である。一方、『椎の木』は百田宗治主宰の同人誌社である椎の木社の活動の中心として大正十五年から昭和十一年の間、二回断絶しつつ刊行された詩誌である。

この両誌—『MADAME BLANCHE』と第三次『椎の木』—は同じく昭和七年に創刊され、そのメンバーも一部重なっていたが、昭和八年五月号『椎の木』で北園は『椎の木』新人同人のアンソロジーである『詩抄』への批評の執筆を任されており、この評が発端で、北園の言葉を借りれば『MADAME BLANCHE』対『椎の木』のスキャンダルが起るのである。そして、その翌月の『椎の木』に今度は椎の木同人によって北園の評への批評が登場し、以降誌面の上で攻防を交わすこととなる。

本発表では、この両誌の間に実際あったスキャンダルを明らかにしたい。これは両誌研究はもちろぬ、昭和初年のいわゆるモダニズム詩誌研究においても新しい視座となると思われる。

* 第三会場

朝鮮語と日本語の間の「近代」——鄭芝溶論——

金東僖

(要旨)

本発表は、植民地時代における朝鮮の知識人の朝鮮語と日本語という二重言語による創作に注目し、鄭芝溶のトランスエクリチュールとしての作品創作を検討することを目的とする。

「韓国現代詩の父」と呼ばれる鄭芝溶(チョン・ジョン、1902~1950)は、1923年から29年まで同志社大学で留学し、北原白秋が主宰した雑誌『近代風景』によって日本詩壇に正式にデビュー

した人物である。彼は留学中に朝鮮語と日本語の詩を発表したが、それらの作品は改作とみなされるほど類似している。

鄭芝溶が韓国現代詩の起源に位置づけられている理由は、感覚的な朝鮮語の詩語を活用しているからであるが、このような彼の言語感覚が日本語の詩の創作と関係することに注目している研究は少ない。そのため、本発表では、鄭芝溶の朝鮮語・日本語の二重言語による改作を検討しながら、「文学語」として朝鮮語が定着していく過程を分析する。

移動と創作言語から見る金史良の生成

——北京への「漫遊」と日本への「密航」をめぐる二言語の随筆を中心に——

高橋梓

(要旨)

朝鮮人作家・金史良(1914-1950?)は、1939年から1942年にかけて日本の雑誌に多くの作品を発表した「日本語作家」として知られているが、同じ時期に随筆も多く書き残していた。随筆の中には、渡日する際に「密航」を試みたことや、東京帝国大学を卒業した後に北京を「漫遊」したことなど、自身の日本や中国への移動をめぐる経験について書かれたものがある。これらの移動の経験をもとに書かれた作品もあるため、金史良の作品はさまざまな場所を移動した作家の経験と深く関連しているといえるだろう。ここで注目したいのは、金史良がこれらの移動の経験について朝鮮語でも随筆を書き残していたことである。本発表では、金史良の移動をめぐる随筆が二つの言語によって書かれることで、それぞれどのように異なる経験として語られることになるのかについて明らかにし、金史良作品においてこれらの移動の経験が持つ意味についてとらえなおしたい。

* 第四会場

Nagai Kafû *La Sumida* から永井荷風『すみだ川』へ

南明日香

(要旨)

外国の日本近代文学研究者にとって作品の理解以上に困難なのは、作家・作品にまつわる研究史上の用語である。用いないで論じると、「外からの参考になる視点」であったり評論的であったりするとみなされる。従来の研究を踏まえてそれを発展させるのが、研究論文の基本だからである。本発表で試みるのは、こうした用語を用いない解釈を起点とした作品分析である。具体的には、近年盛んな「江戸趣味」研究で注目されている永井荷風の『すみだ川』(1909年)を取り上げる。本作は1988年に Pierre Faure によって *La Sumida* のタイトルでフランス語に翻訳され、訳と解説の質の高さもあってロングセラーとなった。発表者が過去に発表したフランス語を共通語とする非日本研究者のシンポジウムでも、荷風のテキストの分析は日本情緒を越えて常に共感を得ている。本発表では Faure やその他同訳によった外国人研究者の指摘を発展させつつ、従来の研究史をも尊重したうえで新たな作品解釈の可能性を探りたい。

日本近代文学と芸能におけるモルナール受容

Forgo Teodora Maria

(要旨)

モルナール・フェレンツ (1878-1952) はハンガリー、及び中央ヨーロッパにおける近代文学の主要な作家である。モルナールの作品、特に戯曲は出版直後にヨーロッパ、またアメリカで流行となった。

モルナールの活躍は、日本では森鷗外によって初めて『椋鳥通信』で紹介され、三つの小説が翻訳された。その後、川端康成や飯島正もモルナール作品の翻訳に従事し、鈴木善太郎は日本語のモルナール全集の刊行を試みた。これによって、モルナールの影響は芸能分野や教育にも伝わった。

ヨーロッパ近代文学におけるモルナール受容はよく研究されている。しかし、日本近代文学におけるモルナール受容の研究はほとんどない。そのため当発表では、日本文学におけるモルナール受容の紹介とともに、作品が日本文学に与えた影響、及び作品の翻訳が果たした役割を取り上げる。

◆坂井セシル氏講演要旨および例会要旨については、『会報 127号』もしくは日本近代文学学会 HP 内 11月例会告知ページ掲載の PDF ファイル「reikai2017autumn」をご参照下さい。